

ワークショップ概要

9月5日（水） 09:30～11:30 （WS1～WS5）

9月6日（木） 14:45～16:45 （WS6～WS9）

※ 各教室の収容定員およびワークショップ実施内容により、参加者数を制限させていただく場合があります。原則として初年次教育学会会員の参加者を優先します。

※ WS5、WS9 は大会校企画ワークショップです。

WS1	アクティブラーニング型授業をデザインする — 学習理論の観点から —
教室	C1-201
担当者	森朋子（関西大学）
概要	<p>平成 30 年度に高校の学習指導要領が改訂されました。理論的には、数年後に「主体的・対話的で深い学び」を基盤にしたアクティブラーニング等を経験している新入生が大学に入学することになります。これまで高校教育では、大学入学試験を視野に入れた詰め込み教育が多く行われていることを前提に、学習観の転換を図る初年次教育プログラムが学士課程教育において大きな役割を果たしてきましたが、今後 10 年は、先行して導入している高校と、改訂されてもなかなか動きがよくない高校の出身者で、大きな学習格差が生まれると想定されます。</p> <p>それらを乗り越える 1 つの視点としては、「人はどのように学ぶのか」といった学習理論の活用が有効だと考えます。経験を乗り越えるためには、データに基づいた理論をベースに構成員で議論を重ねることが重要です。</p> <p>そこで本ワークショップは、認知科学や学習心理学における学習理論の知見を取り入れ、より効果的な初年次教育のあり方を模索していきます。まず今年度は、授業デザインにおいて、その格差を軽減することを目指します。ワークショップはレクチャに加えて、そこでの知識を自らの経験に落とし込むことを目的としたワーク、そして取りまとめるクロージングの 3 部で構成されます。職員の方も大歓迎です。</p>
キーワード	アクティブラーニング、高大接続、学習理論

WS2	初年次ポータル科目の運営体制とマネジメント
教室	C1-202
担当者	川島啓二、松尾智晶、中沢正江（京都産業大学）
概要	<p>新入生に対して、大学での学びへの誘いや大学生活の円滑なスタートをサポートするための初年次ポータル科目が多くの大学で開講されている。この種の科目は、ほぼ同一の内容を、複数教員が担当する『同一科目名複数クラス開講科目』となっており大規模科目として展開されている。とりわけ、科目コンテンツについては、英語、数学、物理といった科目とは異なって、科目内容の標準化がさほど進んでおらず、また、授業担当者間における科目内容の共有に課題を抱えているといえる。本ワークショップは、上述の科目コンテンツ共有をはじめとして、初年次ポータル科目を実施・運営していく上での諸問題を、全体的・総合的な視点から取り上げ、初年次ポータル科目のマネジメントに関する問題群の構造化と、改善に資する方法的知見を共有して、(現状ではその意義や要するコストが正当に評価されていない)「科目マネジメント」というコンセプトからのアプローチを図るものである。</p> <p>具体的には、初年次ポータル科目の現状について、現在の課題や困っていることなどの洗い出しと整理を行う。その後、諸課題（授業担当者の割り当てと確保、科目内容の共有、テキストやマニュアル等の教材、運営に当たっての教職協働、成績評価など）をグルーピングし、各課題に分かれて、問題整理と解決への方向性に関する議論を深める。目標としては、問題群の構造化と課題解決へ向けての方向性の共有を図りたい。</p>
キーワード	同一科目名複数クラス開講科目、科目マネジメント、大学教育の質保証 カリキュラムマネジメント、初年次ポータル科目

WS3	演劇的手法によるコミュニケーション環境のデザイン
教室	C4-102
担当者	安永悟（久留米大学）、蓮行（劇団衛星/大阪大学）
概要	<p>演劇は、複数分野の芸術の混交により創造される総合芸術である。「場と情報と身体 of 芸術」と言うこともできる。演劇的手法を授業に取り入れることで、学習者の活動性を高めて授業しやすい学習環境をつくることができるだけでなく、学習者に、性別や属性、専門性の異なる受講者同士がそれらの「差異」を超えて、いかに集合知をつくるかという合意形成のプロセスを体験させることができる。そのプロセスは「コミュニケーション環境のデザイン」のプロセスと言い換えることもできる。</p> <p>発表者の、現在の初年次教育の取り組み例としては、看護学生を対象とした演劇的手法を導入している他、国立大学の主に留学生を対象とした授業に演劇的手法を導入している。また、発表者が代表を務める科研費挑戦的萌芽研究課題「高等教育における演劇的手法を用いた教育プログラムの事例分析と設計指針の構築」では、日本の国立大学の授業にどれだけ演劇的手法が取り入れられているかを調査し、工学や経済学の分野での導入が少ないことが明らかになりつつある。今回の2時間のワークショップでは、発表者がこれまで取り組んできた演劇的手法の事例および工学・経済学分野の授業への応用のアイデアを紹介すると同時に、実際に演劇的手法を用いたゲームを参加者に体験してもらおう。また、そして、演劇的手法の初年次教育への応用について全体でディスカッションを行い、新たな集合知を創出する。</p>
キーワード	演劇的手法、看護教育、異文化交流、集合知、コミュニケーション環境

WS4	学生の経験を言語化し、学びを深めるライティング指導 — TAE(Thinking At the Edge)をベースにした 「経験をことば化する方法」—
教室	C4-201
担当者	成田秀夫（河合塾）、山本啓一（北陸大学）、得丸智子（開智国際大学）
概要	<p>アクティブラーニングが広がり、学生が発信する機会が増えているが、情報を検索して「再発信」するだけに陥ってはいないだろうか。真に発信の「主体」として、学生自身の経験に根ざした思考の発信を促すべきだろう。</p> <p>このような問題意識のもと、私たちの研究グループは、経験から得た知恵（身体知、暗黙知）をことばで表現する方法（「経験のことば化」と呼ぶ）を模索してきた。今回は、哲学者ジェンドリンが創始し、得丸（2008 他）が表現活動としてデザインした TAE (Thinking At the Edge) をベースに、初年次教育で実施可能な「経験をことば化する方法」を紹介する。この特徴を要約すると、次のようになる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内省を促し、思考力と表現力を一体のものとして高める ・経験を相対化し意味づける文章表現へと、段階的・系統的にプロセスをデザインする ・他者との共有や、アカデミック・ライティングへの接続に開かれている <p>本ワークショップでは、時間が許す限り、「記憶の断片を小カードに書き取り広げて俯瞰する（データ化）→小カードを類似性によりグループにする（グループ化）→グループ内類似性、グループ間関連性を短く表現する（パターン化）→キーワードを選定し主張の核心を論理的に表現する（構造化）」という一連の手順を体験してもらいたいと考えている。</p>
キーワード	TAE、経験の言語化、アカデミック・ライティング

WS5	初年次教育と動機づけ ―看図アプローチを活用してみよう―
教室	C4-202
担当者	鹿内信善（天使大学）、大和田秀一（酪農学園大学）
概要	<p>私たちは、看図アプローチという新しい授業方法を考案してきました。私たちが「看図アプローチ」という枠組みの中で開発してきた授業方法や教材には「初年次教育」に活用可能なものが多く含まれています。今回のWSでは、私たちがこれまでに開発してきた授業方法や教材を、初年次教育を行うためのツールとして整理していきます。</p> <p>看図アプローチとは「みること」を重視した授業づくりの方法で、看図作文の研究から発展してきたものです。看図作文は絵図を読み解き、読み解いた内容を作文にまとめていく方法です。看図作文は、中国の国語教育の中で盛んに行われてきた作文指導法です。しかし、中国では2001年の教育改革以降、看図作文の授業が少なくなってきました。また看図作文の授業が行われていたとしても、形骸化したものになってきています。そこで、鹿内らは、中国の看図作文を参考にしながら、作文授業をアクティブラーニング化する「新しい看図作文」を開発してきました。新しい看図作文を開発する中で、私たちは授業構成に役立つ様々な原理を見出してきました。またそれらの原理は、作文指導以外の「授業づくり」にも活用できることを明らかにしてきました。さらに看図アプローチは、アクティブラーニングの核となる協同学習のツールにもなります。</p> <p>今回のWSでは「みること」を重視して「主体的・対話的で深い学び」をファシリテートしていく、汎用性の高い方法とコンテンツを提供していきます。</p>
キーワード	看図アプローチ 看図作文 協同学習 アクティブラーニング 授業づくり

WS6	大教室で教えるための準備
教室	C4-101
担当者	田中岳（東京工業大学）、立石慎治（国立教育政策研究所）
概要	<p>「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた」（文部科学省）ことで、グループ活動を前提とした授業が増えているのではないのでしょうか。確かに、知識伝達（ダウンロード）型の講義よりも、学生の能動性を引き出すグループ活動は、教員にとっても当の学生にとっても「アクティブ・ラーニング」を行った達成感があるものです。</p> <p>とはいえ、大教室における講義形式の授業が、その役目を終えたのかといえば、そうともいえません。講義形式が相応しい場合もあるからです。教育方法として、あるいは科目の配置として仕方ないといったケースが現場で起きていることでしょう。</p> <p>では、それらの授業が従前のまま（講義だからやむを得ない）で良いのでしょうか。大教室の講義形式では、授業（テーマ）に対する学生個々の関わり、グループ活動のような学生間の交流や自身と向き合う省察といった活動は、難しいまななのでしょう。</p> <p>本ワークショップでは、経験豊富な先生、大規模クラスを教えるのが初めての先生、支援策を検討したい職員などの方々に集まっていただき、大教室で教えることに関する知恵を探し出すことを目指します。</p>
キーワード	講義，大教室，大規模クラス，教授法，学習者，アクティブ・ラーニング

WS7	モデル授業公開検討会（4）：テキストの読み方
教室	C4-201
担当者	藤田哲也（法政大学）、中川華林（法政大学大学院）
概要	<p>本ワークショップでは、担当者（中川）が実際に初年次教育の模擬授業を行い、授業後に参加者の皆様と授業内容や授業運営上の工夫等について意見交換をする。今年度のテーマである「テキスト」とは、教科書だけでなく、レポート課題を作成するときに参照する図書や専門課程に進んで読む論文も含む、説明文全般を指す。状況として「レポートを作成するために資料となる図書を読む」場面を想定し、いかにして「読まずに」読むべき図書を取捨選択するのかについて説明するとともに、「読解の困難」を生じさせる原因について心理学の知見に基づいた解説をする予定である。また、著者の主張を的確に読み取るためには文章の構造を見抜くことが有用であることを説明した上で、それらの構造を自分が文章を書くときにも活用する価値があることを実感できるようなワークを取り入れる予定である。本ワークショップでは導入部分を藤田が解説し、続く「模擬授業（中川が担当）」の中で学生が今後テキストを読む際に留意すべき点を体得できるような工夫を実践する。ワークショップ後半では、学生に対するアドバイスの在り方について、参加者の皆様と討論する予定である。参加者の皆様には、前半は学生の視点で授業を受けていただきたく、原則遅刻せずに参加するようお願いしたい。後半の冒頭では、指定討論者（中川）から提示される、授業をよりよくするため論点について全参加者で意見交換をした後、自由な質疑応答も行う予定である。</p>
キーワード	初年次教育モデル授業、授業検討会、気づき、シラバス

WS8	ポジティブ心理学を取り入れた初年次教育を考える
教室	C1-202
担当者	長山恵子（金沢工業大学）、松本かおり（金沢工業大学）、藤本元啓（崇城大学）
概要	<p>教員は授業を通して学生達が生き生きと学業に励むための様々な働きかけを行っている。その働きかけは、授業内容の充実、アクティブラーニングなどの授業運営方法等多岐にわたる。その中で、本ワークショップでは、すでに海外において教育分野への適用例が増えているポジティブ心理学を授業に取り込むことで、学生のウェルビーイング（心身ともに健康な生き方）とレジリエンス（立ち直る力+立ち向かう力）を高め、学生生活を充実させるとともに、学習成果へつなげる試みについて、金沢工業大学における事例も交えて考えてみたい。</p> <p>具体的には、まずポジティブ心理学の考え方、適用事例などを紹介する。そしてその中で重要な要素である「ポジティブ感情」、「強み」、「建設的な人間関係」については、演習を実施することで理解を深めていく。演習では、個人、グループ、組織にポジティブな変化を生み出すための手法であるアプリシエイティブ・インクワイアリー（AI）を用い、様々な人の強みや視点を活用したチームづくりについて考える。最後に、参加者が実際に担当している授業や日常の学生との会話の中に、それらの要素をどう生かすことができるかについても考え、お互いに紹介し合い、意見交換をする時間も取りたいと考えている。その後、参加者からの自由な質疑応答も行う予定である。</p> <p>なお、本ワークショップの内容は、初年次の学生に対して活用できるだけでなく、教員間や教職員間にも応用できるため、いろいろな立場の方々に参加いただきたい。</p>
キーワード	ポジティブ心理学、ポジティブ感情とネガティブ感情、自分の強みを知る 他者との良い関係を作る

WS9	初年次教育とチームづくり — HUG(避難所運営ゲーム)を例として —
教室	C1-302
担当者	牧野典子（中部大学）、大和田秀一（酪農学園大学）
概要	<p>今日、大学はグローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化に対応できる有為な人材の育成と未来に希望を見いだせる学術研究の発展に向けた大学改革の取組みの中で、大学の特徴を生かしつつ努力している。本学の取組みの一つが「春日井市における世代間交流による地域活性化・学生共育事業」である。まちづくりを通して、共に学び（共学）・共に育つ（共育）ことを目的にしている。学生は地域と協働で取組んだ活動「動く」に参加し、全学共通教育科目および学部正課の地域関連科目の単位修得をもって「地域創成メディエーター」の認定を受けることができる。これまでに約 2000 人が認定されており、地域に優しい心配りができる真のリーダーの育成を目指している。</p> <p>事業の意向を受けて、全学共通教育科目「地域の防災と安全」と学部の正課科目「災害看護論」に地域の防災リーダーたちと協働の HUG を取り入れた授業を展開している。その授業の学習目標は、①災害時の避難所対応を通して地域の問題に気づき、個人で考え、仲間と話し合っ何らかの解決策を実行すること、②実行した解決策をふり返り、災害前に何を学び、何を備えていればもっとよい解決ができたかについて考えることである。HUG を通して保健看護学科の学生は災害時要配慮者への対応や感染症予防などの専門的知識を修得し、全学共通教育科目の履修生はリーダーシップ・メンバーシップの学習に繋がっている。</p>
キーワード	地域活性化 学生共育事業 避難所運営ゲーム リーダー育成